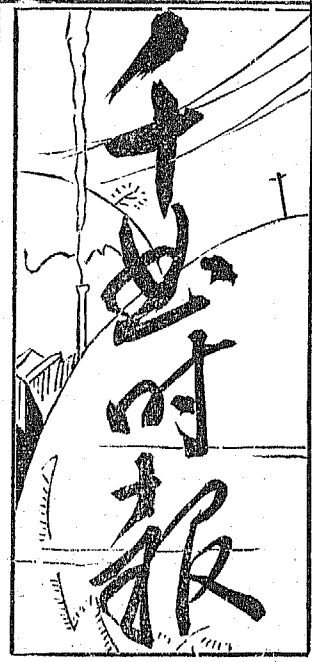


每月一四十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共五十錢）



編輯 兼 發行 所 長 加 野 上 野 同 野 長 兼 編輯 兼 發行 所 長 好 市 田 專 門 校 部 男 好 美 加 兼 編輯 兼 發行 所 長 男 好 美 加 兼 編輯 兼 發行 所 長 男 好 美 加 兼 編輯 兼 發行 所 長

### 蠶業合理化問題

近時産業の合理化なる問題について政治家と云はず實業家と云はず、其他荷も産業に關係ある人々は一かどの議論を吐いて世の中は産業の合理化でなくては夜も日も明けぬ有様である。乍然此「産業合理化」なる物の正体は何物であるか甚だ不明瞭なる點がある。總ての産業が發達する道程は常にそのオルガニゼーションの上に、不適當なる點について改廢が行はれて行く所にある、即ち合理化は不斷に行はれつゝある結果に外ならないではあるまいか。然るに近時急に合理化の聲をそらして叫ばなければならぬならば、今迄は政治家と云はず、實業家と云はず、技術者、官吏總ての人間が合理化を忘れて居つた事に歸する譯であるがそれ程ひどく過去に於て怠つて居つたとも考へられない。それよりむしろ所謂世の中の此不景氣が合理化を急に叫ばなくてはならない所に立到らしめたと解す可きであらうと考へられる。して見ると合理化と云ふ物は極めて泥繩的、近視眼的、迫つて來なければ如何とも爲す能はざる

物の様にも考へられる。乍然翻つて考へて見ると、合理化は如此一時的の周圍の狀態の變化によつて本質迄も變化するが如き淺薄な物でなくて永久不變の眞理であつて、景氣不景氣にかゝらず其態度一貫、常に進みつゝある物であらねばならない。近年迄の我蠶絲業の業態は、此合理化の上に立つて進むで來たと考へ得られる、即ち蠶の品種問題について桑園の栽植について、繭質向上に對する養蠶技術の進歩について、繭の乾燥保管について、生絲々質向上に關する製絲技術について、それぞれ常に不適當なる點を外きて進歩發達し、米國の生絲の消費に對する國內の生産増加も先づ適當なる速度を以て進めて來たと見て間違ひない程度であつた。以上の如く國內的に見れば合理化は進められて居つたが、一度我蠶絲業を世界の生産業の中へ混在せしめた時に、合理化に大きな又カリがあつた。それは生絲消費の上、殊に米國の生絲の消費の上に、米國の人にのみ任せて放任した、手

ヌカリである。國內の生産の増加と共に（國內は着々合理化によつて生絲の増加は確定的に押し進められて行く）放任して置いても米國の消費は増加するものであると考へられた、自身の生産が米國の抱容力の圍内にある事に氣付かず居た、消費力と生産力との間の合理化が欠けて居た事である。次は人造絹絲の發達が、生絲の生産業を浸害する物でないと云ふ、むしろ人絹は生絲の需要を刺激して好結果をもたらすと云ふ、人絹の人々が生絲の上を思ふ程忘れもしない、蠶絲業關係の識者は丁度耳を掩つて鈴を盗む様な態度であつて、これを眞に受けて當々として今日迄暮穴を掘るとも知らず進んで來た養蠶業者こそ氣の毒である。さて舞臺は廻つて今日の蠶絲不況の場面に展開する。曰く「蠶絲業不況對策」と銘打つて現れたのが、絲價保証法の出動であつて見事失敗尾を巻いてしまつた。次は當時流行の、正体の不明な産業合理化を擔ぎ込むで、掃立制限を叫んで見たが、掃立は制限しても、後に取殘された見事な桑の始末を如何にするか此の點の仕末が着かずに單なる掃立制限は不合理化であつて、養蠶は大豊作、繭價大暴落に終つて了つた。其の次に叫ばれた題材は、繰短の徹底的遂行であつて七八ヶ月製絲場を休業する事によつて、到底掃立制限をなし得ない養蠶家には目もくれずに製絲業者は自衛的に遂行する宣言を放送したが、セメントや綿絲の繰短と異つて、工場の統制のとれない製絲業者は團體的の結合がつかず、他の同業者にのみ繰短をせしめて、自己は

繰短したくない心持が自然と一致して繰短をしない事に不言の間に定まつてしまつた。かくて生産のみ増加して、消費の増加しない結果益々絲價は下落の一途をたどつて居る。これでは蠶業の合理化どころか不合理化が何等の障害物にも阻止せられずに行はれて合理化先生は徒手傍觀の態にあるが現在の狀態である。我生絲の如く、それ自体が原料品であつて、之が加工及利用は國外に於て爲される、即ち加工と原料製造とが同一國內に於て行はれない結果、原料業者と加工業者とは對國家的に稍々相反する利害關係を有し、他方原料製造業たる製絲業は五百萬戸からの數を有する養蠶業者の比較的小生産額を集めて原料と爲す點に於て、人造絹絲の原料たるバルプの生産の如く單一なるオルガニゼーションを以つて生産する事が不可能であり、又棉花の栽培の如き廣大なる面積に比較的單一な方法を以つて生産する事は困難である。其上産繭は農産品である所の特性を有して、生産額の豊凶を左右する事が困難であり又單に生産制限を爲す事は最も困難である、茲に於ても亦製絲業者と養蠶業者の利害は稍々相反し、共存共榮は、或る時期に於ては存し、或る時期に於ては存しない結果に歸決するのである。若しも産繭額を何等かの方法によつて自由になし得る事が出來たならば養蠶家及製絲家は非常有利の立場に立ち國家としても有利である繭の産期は一ヶ年三期あるが故に、生産調節は容易の如く考へられ直に掃立制限をなし得るものと考へ得らるゝも、養蠶上最基幹を

なす裁桑は數ヶ年を要するが故に其生産調節は、一年生植物である棉花以上の如く考ふる時は蠶業の合理化は一般養蠶家の福利を考へ、製絲業の立場を有利に導き、他方に於て人造絹絲の壓迫と對抗し販路を擴張しつゝ進まねばならぬ。故に合理化を計る地域は國內、國外に及んで居る事は、折角の合理化をしかく識者の考へて居る如く簡單に行はれ得ない事に歸着するのである。然らば蠶業の合理化は不可能であるか？ 先づ不可能であると答へた方が眞に近い、少くとも、今日の如き手ヌルイ合理化方法を以つてしては有名無實に近からうと思はれる。而してなき合理化を計らむとするならば、自己の手の届かない米國の消費はそのまゝとしておいて、繭の減産を計らなければならぬ。爲之には、一切の生産獎勵機關を停止して、第一に來る可き冬期に於て荒廢した桑園を變更し全部食糧品の生産に振向け、改植を行はぬ。又水田を變更した桑園は水田に還元する。新に桑園を作らない事は勿論である。次に繭價と絲價とが何時も相一致した行動をとらせる爲めに組合製絲を設立して、日本の生絲の産額のおよそ二分の一は組合製絲の手によつて生産せしめる様にす可く、養蠶業者は組合の力によつて縦の方向に又横の方向に團結及統制を計る事にしなれば産繭額の減少し、養蠶家の蒙る損害を極めて輕微ならしめて行ふ事を得るのである。かくて常に生産を手控へて、消費量以上に出でさせしむる事が最も必要なる合理化の

目的であらねばならない。かくする時は日本の生絲の生産額は逐年減少して終には伊佛の養蠶業の如くなりはいまいか？ 將に蠶業は漸時衰退せしめて他の生産業と變更せしむるのである。

### 松村技師の外遊

長野縣蠶業試験場の重鎮で、蠶休生理及遺傳學の權威者である松村季美技師は、今回農林大臣の命を受け伊國 Padova に開かるゝ第十一回萬國動物學會議に出席同會蠶糸部會に於て、次の如き二題目に就き講演される筈である。

1. On "Kuh-to-disease", a Kind of Flacherie which attacks mainly Young Larvae of the Silkworm Bombyx mori, L. in Japan.
2. Biochemical and Genetical Studies on Some Enzyme Actions of the Larvae of the Silkworm, Bombyx mori, L.

講演の内容は蠶絲學雜誌第三卷第一號に登載の豫定である。右學會は世界中の斯界の泰斗の集りであり、種々な新説や研究の發表がある筈であるし、我邦からも動物學の他の部門の人で二三出席されるらしいが蠶絲に關係の方面では我松村氏唯一人であるらしい。今迄本邦に於ける蠶絲に關する研究發表の少ないに拘はらず、さまで世界の學

ふる時、我國の蠶絲業をして一日も早く輸出の大宗を解き、僅に二期二期の産額値下りによつて五百萬養蠶家の豊ならざる經濟を破壊せしめて、小學教育をも満足に遂行せしめ得ず、又重大なる納税の義務に事欠かむとする状態より脱せしめねばならぬ。

日、松村技師の今回の出席は世界に向つて我蠶絲學の爲に大いに氣を吐くものである。従つて同技師の責任たるや重大である事勿論であるが、多數ある蠶絲學者の中で同氏の撰ばれた事は同技師積年の努力の結果である。我蠶絲業の爲に致々二十幾年の熱誠の一端が固形状化したものである。我等は同人諸兄と共に同技師の此行を心から祝福するものである。

同氏は學會終了後、伊國及佛國の蠶絲業の現状は勿論其興隆、衰亡の原因を探究せられる筈である。此れは國難的と迄稱せらるゝ現時我蠶絲業の窮境に對する最もよき方策を齎す事必然である。東亞の蠶絲學に脅かされ、現に人絹の壓迫を感じつゝ、も可成な隆盛を示せる佛國の蠶絲業の實態は同技師の如き學術に且は蠶絲業の實地に通曉せる人士に依りてのみ真相を知らるゝものであらうと思ふ。支那の蠶絲業があり、人絹業が恐ろしい我蠶絲業に取つて此調査は非常な決断を我等蠶絲人に與へて下される事と思ふ。

更に同技師は獨、英、埃、瑞、丁等の歐洲諸國の生物研究所や大學を訪ひ知名の諸大家に意見を質さるゝ筈である。尙米國へも渡つて同地蠶業の視察は勿論大學研究所等を訪問される筈であるから同技師歸朝の後の活動には今より我等十分の期待を以て居てよいものと信ずる。我等は同氏の行程一路平穩ならん事と我蠶絲學の世界への紹介を十二分にせられん事、及び彼等の長とする所を一つにても多く持歸られん事を切望する次第である。

## 朝鮮の繭 (二)

### 第四章 生産の狀況

#### 第一節 生産高

(一) 年産高 朝鮮繭の産額は逐年増進の一路を辿り昭和三年三十八萬六千余石を算せり。之を内地に於ける最大産地たる長野縣の年産約百萬石に比するときは未だ其の三分の一強に過ぎずと雖も併合當時に於ける繭

産額一萬三千余石に比するときは正に其の産額を二十七倍せるものにして増加の顯著なる事實を看取し得べし。而して産額百萬石増收計畫は大正十四年を以て實行期に入れるが故に今後に於ける増加は一層顯著なるものあるべく百萬石の産額を擧ぐるは決して遠きに非ざるべし。既往累年産額次表の如し。

年次	飼育戸數				合計	價額
	春繭	夏繭	秋繭	冬繭		
明治四十三年	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	1,300,000
明治四十四年	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	1,300,000
大正元年	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	1,300,000
大正二年	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	1,300,000
大正三年	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	1,300,000
大正四年	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	1,300,000
大正五年	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	1,300,000
大正六年	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	1,300,000
大正七年	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	1,300,000
大正八年	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	1,300,000
大正九年	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	1,300,000

(二) 地方別産高 繭は全鮮各地に普遍的に達するも慶尙北道安東、尙州平安北道寧邊地方は特に産額多き地として知られたり而して道別に見たる産額の多きは慶尙北道を第一とし

昭和三年六萬三千石を産し全羅南道江原道、忠清南道、平安南道、感鏡南道、忠清北道、等各伯仲の間において之に相次ぎ最も少なきを感鏡北道とす。即次表の如し。

道名	飼育戸數				合計	産別割合
	春繭	夏繭	秋繭	冬繭		
京畿道	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	10.0%
忠清北道	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	10.0%
忠清南道	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	10.0%
全羅北道	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	10.0%
全羅南道	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	10.0%
慶尙北道	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	10.0%
慶尙南道	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	10.0%
黄海道	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	10.0%
平安南道	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	10.0%
平安北道	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	10.0%
江原道	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	10.0%
感鏡南道	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	10.0%
感鏡北道	1,017,333	1,500,000	1,800,000	1,800,000	5,117,333	10.0%



其効果を受容することを得べし。而して各家庭に行はるゝ養蠶は、整居に馴れたる婦女子の勞力を利用するに甚だ有利の状態にあり。之を以て朝鮮に於ける繭一石の生産費は小作料を加へ、勞銀を十分に見積りて尙四十圓内外にて足ると云はる。尤も本生産費は一反歩の桑畑を以て養蠶をなし二石位の收繭を豫想しての計算なるが内地人養蠶家中には桑畑一反歩に付二石五斗乃至三石の産繭を實際に

桑畑一反歩當養蠶の收支

科目		金額	
収入	金額	摘要	金額
繭代	二六、〇〇	春蠶三枚秋蠶二枚飼育するものとし、收繭量一石三斗合計一石八斗とし、繭價石に付七十圓とす	三〇、〇〇
支出	金額	摘要	金額
繭園費	三〇、〇〇	肥料推費五〇〇圓計拾五圓、豆粉二枚五圓計拾圓、園手八人夫男三〇人、七〇錢貳拾壹圓、桑苗其他の費用二圓	三六、七〇
育蠶費	三六、七〇	育蠶人夫男六人七〇錢、宛四圓二〇錢、同女七〇錢、人拾五錢、宛一〇圓九〇錢、蠶種五枚一圓八〇錢、宛五圓、蠶具其他の費用一圓	七、七五
小作料	七、七五	六、五圓棉花二五斤を小作料として納入するものとし、斤二五錢宛	七、七五
計	一三六、〇〇		計

差引利益 金四八圓〇五錢

備考 桑畑一反歩當蠶種播立枚数を春蠶三枚秋蠶二枚とせるは收養量を春二百四十貫、秋百六十貫とし、蠶種一枚の飼育に要する桑量を八十貫と看做せるによる。繭の生産費石當四十三圓三十錢は本表支出の部合計繭の七十七圓九拾五錢を産繭高石八斗に割あて算出したるものなり。(續)

紫外光線の製絲に關する實驗 (三)

第五節 色別割合と解舒 係は、前節の蠶品種を同ふして環境を異にした場合の實驗成績や飼育係

長野縣工業試驗場技師 岡村源一 助手 岡村丁一

件を等しくして蠶品種を異にした場合の成績、殊に上簇試驗及び蠶品種並に一地方産繭に對する實驗成績等で充分窺ひ知れるのであるが、更に其の間の消息を探及する爲に次の如く試驗範圍を延長して實驗を反覆したのである。

正白×昭和種

供試繭は昭和三年夏蠶にして筑摩社へ同日に供繭されたもの、中より採取する。

項目	色別割合		對一時繭量	生糸量
	黄色	紫色		
平均	七三、七五%	二六、二五%	一〇、七五	一七、一三
人別	一五、三〇%	八四、七〇%	〇、六五	一六、八六
ク	二〇、三〇%	七九、七〇%	七、四〇	一五、〇五
ス	二〇、三〇%	七九、七〇%	一〇、〇〇	一六、五五
タ	二〇、三〇%	七九、七〇%	二、二五	一八、六〇
キ	二〇、三〇%	七九、七〇%	二、二五	一八、六〇
ア	二〇、三〇%	七九、七〇%	二、二五	一八、六〇
平均	七三、七五%	二六、二五%	一〇、七五	一七、一三

正白×歐九號種

項目	色別割合		對一時繭量	生糸量
	黄色	紫色		
平均	七三、七五%	二六、二五%	一〇、七五	一七、一三
シ	四、三〇%	九五、七〇%	九、五五	一七、六六
ソ	三、三〇%	九六、七〇%	二、九〇	一六、二二
セ	二、三〇%	九七、七〇%	二、九〇	一六、二二
ス	一、三〇%	九八、七〇%	二、九〇	一六、二二
タ	〇、三〇%	九九、七〇%	二、九〇	一六、二二
チ	〇、三〇%	九九、七〇%	二、九〇	一六、二二
平均	七三、七五%	二六、二五%	一〇、七五	一七、一三

市場購入繭に對する實驗

供試繭は昭和三年春蠶小諸東信社繭市場より購入したものであつて、繭格付試驗用として同市場の二日間の出廻り荷口中より任意に一日百口宛合計二百口(白繭百六十二點、黄繭三十八點)を採取した繭である。

右供試二百口に對する各口毎の成績は卷末に附録として添付しある明細表を参照されたいが、今其の色別割合と解舒並に糸量の相關々表(コルレーション表)を見ると次表の様である。

黄色對紫色割合	對一時繭量										平均對時間繭量	
	7.5	8.5	9.5	10.5	11.5	12.5	13.5	14.5	15.5	17.5		
12:1						1	2				3	13.2
9:1					1		1	1			3	13.2
7:1					2	3	1				6	12.3
4:1			1		3	12	7	5	3	1	32	13.8
3:1	2			3	8	12	11	7	4		47	12.8
2:1				3	13	9	10	2	5		42	12.7
3:2					2	2	7	3			14	13.3
7:5	1					1	5		1		8	12.9
1:1					2		1	1			4	12.8
3:4						1			1		2	14.0
1:4					1						1	11.5
計	3	1	6	32	41	45	19	14	1		162	12.9
平均黄色對紫色	2:1	4:1	5:2	4:1	3:1	2:1	3:1	2:1	4:1		3:1	

黄色對紫色割合と生糸量			平均對時間繭量	
黄色對紫色割合	生糸量	平均		
21.5	22.5	23.5	計	
1				製絲量
			3	28.0
			3	20.2
			6	20.0
7	2	1	32	20.6
16	5		47	19.6
11	1		42	20.2
	1		14	20.4
	1		8	20.0
1			4	20.0
			2	20.0
			1	19.5
36	1	1	162	20.5
4:1	2:1	4:1	3:1	

計	平均 生糸量
1	18.5
2	19.5
1	19.5
1	19.5
5	19.5
4	19.5
10	19.2
9	18.5
1	21.0
1	18.5
1	20.5
1	17.5
1	38
2:1	4:1

黄色對紫色割合と生糸量

個 黄:紫	對一時間繰絲量							計	平均 時間繰 絲量
	9.5	10.5	11.5	12.5	13.5	14.5	15.5		
2:1					1			1	13.5
19:1					1	1		2	14.0
14:1					1			1	13.5
11:1					1			1	13.5
9:1	1				3	1		5	12.9
7:1			1		1	2		4	13.5
5:1	1		3	2	3		1	10	12.5
3:1	1	1		2	2	2	1	9	12.9
2:1		1				1		2	12.5
1:1		1						1	10.5
1:8						1		1	14.5
1:16			1					1	11.5
計	3	3	5	4	13	8	2	38	12.9
平均 黄色:紫色	6:1	2:1	1:1	4:1	9:1	3:1	4:1	4:1	

歐九號×正白種に對する相關作用  
黄色對紫色割合と對一時間繰絲量

個 黄:紫	生			
	17.5	18.5	19.5	20.5
12:1				2
9:1			1	2
7:1		1	1	4
4:1	1	1	5	15
3:1	1	2	5	18
2:1	1	6	10	13
3:2			4	9
7:5			5	2
1:1		1	1	1
3:4			1	1
1:4			1	
計	3	11	34	67
平均 黄色:紫色	3:1	3:1	2:1	4:1

此の計算はピアソンの公式である次の算式によつた。

$$D_x = \frac{SD_x \cdot D_y}{\sqrt{SD_x^2 + D_y^2}}$$

$D_x$  = X軸の平均よりの偏差

備考  
1、X軸の黄色對紫色割合は黄色繭の發現個數に對する紫色繭の發現個數の比を示して居る。即ち三對一とあるは黄色三箇に對して紫色繭一個發現したる意味である。  
2、Y軸の對一時間繰絲量並に生糸量は何れも一丸毎の級價を以て表はして居る。  
3、X軸及びY軸の總平均價は何れも總數に對する平均である。  
右の成績を基礎にして相關關係の係數をピアソンの公式に依つて計算すると次の如き數を得る。  
螢光色別と對一時間繰絲量相關係數。  
白繭種の場合………0.033  
青繭種の場合………0.11  
螢光色別と生糸量相關係數  
白繭種の場合………0.1  
黄繭種の場合………0.1

個 黄:紫	生糸量			
	17.5	18.5	19.5	20.5
21:1		1	1	
19:1			2	
14:1			1	
11:1			1	
9:1	1		2	2
7:1		1	2	1
5:1		5	3	2
3:1	2	1	5	1
2:1				1
1:1		1		
1:8				1
1:16	1			
計	4	9	16	8
平均 黄色:紫色	1:1	6:1	8:1	3:1

區別	供試同上		對一時間繰絲量	生糸量	繭糸量	繭肌合計	繭力	繭節	繭節強度	繭節伸度
	繭量	繭數								
黄色區	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
中間區	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
紫色區	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

第六節 色別と製糸關係  
繭の紫外線下に於て發する螢光色別の割合が蠶品種、飼育條件或は其の他の環境を異にする事に依つて種々相違ある事は前節來記述の通りに勿論なれ共一般論としては、雌雄關係を同する同一蠶品種にして同一地方の同一時期の蠶繭に於ては黄色繭の割合多い程、又養蠶上望ましい飼育條件や種々の好環境に支配されて其の蠶品種の特性以上に黄色繭の割合が多く現はれたもの程、製糸原料繭としての價値は多い様に認められるものである。然し製糸上の實際問題として其の關係がどの位影響あるかを突き止める爲次の如き試驗を諸種の繭に就て色々の方向から反覆して行つた。今其の經過の概要を表示する。

然し茲に注意を要する事は或る蠶品種の繭が其の蠶品種の固有である又通有性であるべき螢光色の發現状態を逸して特に紫色繭の割合を増加したる場合であつて、これは多く其の繭が上簇或は其他の環境に於て養蠶上望ましくない結果に置かれたものである事である。螢光色別割合と繭質關係を云々する場合には前節にも叙述した通り此の關係を充分知つて蠶品種關係及び養蠶上の諸條件を念頭に置いてかかる事が大切であり見逃せぬ事項である。

昭和二小縣郡地方支四號×日一號



備考 二名の繰手四回反復試験の平均成績とす。昭和二年同地方日一號×支四號種

Table with columns: 項目, 供試同上機時, 間線系生糸量, 生糸, 對一テ, 伸度. Rows for 黄色區, 中間區, 紫色區.

昭和二年長野地方秋日支交雜種

Table with columns: 項目, 供試同上機時, 間線系生糸量, 生糸, 對一テ, 伸度. Rows for 黄色區, 中間區, 紫色區.

備考 白繭合併繭を二色別に分ち二名にて六回反復す。糸量並解舒比較

Table with columns: 項目, 解舒指數, 糸量指數. Rows for 黄色區, 中間區, 紫色區.

備考 實驗例の對一時間繰糸量及び生糸量に就き黄色區を一平均として指落緒歩合

Table with columns: 區別, 支四×日一, 支四×日一, 支四×日一, 支四×日一. Rows for 黄色區, 中間區, 紫色區.

備考 新皮とは添緒後第一回目の落緒繭、薄皮とは其の落緒繭の再落緒を意味する。

黄色繭と紫色繭とを別々に繰糸した場合は黄色繭の方が繰糸の能率糸量糸質上稍々優る傾向を略認められたるに紫外光線にて螢光色別に分離を行つて別々に繰糸した場合と、分離を行はず其のまゝにて繰糸するも

Table with columns: 項目, 供試繭繰時, 對一時間繰糸生糸量, 生糸量合計, 織度, 對一テ, 伸度.

Table with columns: 卵黄色區, 中間色區, 暗褐色區, 色別區平均, 標準區. Rows with numerical data.

備考 四回反復試験の平均表である。

以下次號

向山さんの片影

加美好男

非常識の大家向山さんが逝つた。晝飯を食つてぼんやり机に倚つて居たら蒲生さんから電話で向山さんが急になくなられたと云ふ。何でも午前十一時半だと云ふ。病氣であつた事は最近一度も耳にしない、之れは頓死だと決定して終つた。井上先生平澤君等とも話し合つた。恐らく晝飯前のあの忙しい大阪の街の中で向山さんが例の非常識と突撃的な向見すから、不慮の災害に遭はれたに違ひないと僕は断定してしまつた。處が二三日経つて一ヶ月も前から重病で苦しんで居られたと云ふ事が判つた、而して遂に再び立つ能はざる事になつたのだと聞いて、僕の先の断定を甚だ申譯なく思ふ。それにしても一ヶ月もの長い間重病で入院加療して居られた事を知らなかつたのは全く迂闊であつた。

又我等同人の中の三四の諸君は向山さんの御膝下で働いて居られたのに其様子を少しも知らせ下れなかつたのは甚だ残念でならない。忙しかうが葉書一枚位書けない程に余暇のない事はあるまいと思ふ。

でも平氣ですまして居た事も一回や二回じやない。労働者がよく買つて食ふ大きな餡餅の焼いたのを七八つ買つて懐中して歩き乍ら、道頓堀や千日前の盛り場、さては心齋橋通りを平氣でむしや〜と食べ乍ら歩いた。而して通りがかりの巡査をつかまへて「大阪は食ふ都だからこんな事位何でもないだらうね君！」と聞いて巡査から「貴下の着けて居られる袴に御聞き下さい」と返事されてもフ〜と云つてすまして居たものだ學校では専門科の外に獨逸語も教へた研究は殆んどやらなかつたが勉強は大變やつた様だ。赴任最初の年の夏休みには一週間何處かへ養蠶教師に行かれた様に記憶して居る。何でも學費の借金がまだ大分残つて居るからどつさり稼がねばならんと云つて居られた。それで高工の先生の外に高工附設夜學校の先生、神戸高商の講師それから關西商工學校の先生等をやつて居た。

せめて一つ位は見ないと歸つてから話しが出来んからね」僕は此時外國へ来る事が向山さんの様な人をでも幾分世間並化する力を持つて居る事に気がついた。それから二人であのMollendorf Platzで地下電車を下りて日本人俱樂部で夕食をやつて直ぐ近くの芝居小屋に行つた。所が一番安い(たしか二十五錢位)席へ入らうと云ふ事で切符を求めたが空席がない。やつとの事で一つあつた。そこで君一人見る事にして僕は其まゝ歸つた。翌日君の下宿を訪ねて昨夜の芝居はどうだつたと聞いたら「芝居なんて全くつまらんものだね」と云つた切りで話しは外にそれと終つた。當時君は北海道出の方で米國で長年勉強して更に獨逸へ来て君と一所に Leipzigで苦學勉強中遂に不歸の客となられた友人の遺骨を持つて國へ歸らんとして居た。之れに三千圓の保険をつけた相な。貧困な僕が此保険料を拂つての注意だから、若し途中無くする様な事があつても日本の奥様へ對してわしは申譯が立つと思ふ」と云つて居られた。

それから翌昭和三年の初夏偶然京阪電車の中で君と一所になつた、其時、君は前車に居て僕は後車に居たが僕を見ると直ぐ君は車掌に窓硝子を下させて先ず君の靴を僕の方の車へ移し、次に君は窓から俯ひ出して僕の方の車の窓へ半身を水平にぬつと差出した。思ひがけぬ行動で乗客一同ワツとふき出して終つた。電車は淀川の鐵橋の上を急速度で進行中なんだからね。そして漸く二人で腰を下ろしてからの話しが振るつて居る。先づ君の曰く

「君今月給をいくら貰つて居るか」「食ふだけは貰つて居るよ」「石原君から聞いたが、すばらしく澤山貰つて居ると云ふじやないか。四百か五百か?」「君の想像に任せよ。一体それがどうしたと云ふのだ」「實は最近僕は東京の人網關係の或會社に入る事に話しが進んで居る。勿論技師長だが君の取つて居る給料より少いと云ふ法はないから君の實收額を聞くのだ」「こんな會話を大聲でやるものだから近所の人達はクツクツと笑つて居た。」「其は京都の四條で遭つた切りだ。誠に惜しい事をしたと思ふ……あんな男を無くしたのは。何處迄も考へた事はやつければ止まない男で必ずやり遂げる所に君の偉大さがあつたと思ふ。最後に君の御世辭の旨さ加減を一寸附加へる。僕が臍所に居た新婚後まだ二十日ばかりか經たぬ或日の朝五時(四月頃)突然とやつて来た。」「やあ御早よう、今汽車で大津へ着いたので君の所へ朝食を食ひに来たんだ。御馳走して下さい」家内は早朝から此挨拶を聞いてまごついて終つた。それでも何とか食ふ物を作つて朝食を二人で初めようとした所初めて家内と顔は遭はしてその挨拶に

### 唐澤さんをおもふ

碓氷 茂

明けても暮れても、千曲川と淺間山を眺めて暮す南佐久の平和な農村を動搖させる事件が起つた。それは私が小學校の頃であつた。僕の村は南佐久の最北端の岸野村といふところだが、その事件は東隣りの櫻井村に起つたのである。

「蠶絲専門を卒た人で、素晴らしい金持ちの娘さんを貰つた人があるさうだ。とても立派な衣裳で、家中が一杯いになつたさうだ。」と、いふ噂が僕の村迄傳つて来た。

それから幾年か流れて、僕が蠶絲専門一年の正月だつた。中込驛から佐久鐵道で上田へ向ふ僕を呼び止めた丈の高い中年の紳士があつた。「君は上田の學生だね。僕も上田をやつたよ」

と、僕の帽章を見て話された。この紳士の話によると、紳士は、櫻井村の出身であることがわかつた。その時僕は、この人が、小學校の頃の金持ちの娘さんと結婚された人だと考へ出した。この人こそ唐澤藤藏さんだつたのだ。

その年の三月、僕は個人で紡績實習を計劃してゐた。それで當時仙臺にをられた唐澤さんに手紙を書いて。唐澤さんは、片倉關係の福嶋市外杉妻村の紡績會社が、工場擴張中であるといふので、福嶋へ心配して

下さつた。郡山へも心配して下さつた。それまで片倉では紡績實習生を取つたことがないので、僕が實習をするためには、唐澤さんの御配慮は一通りではなかつた。

試験が終わると、直ぐ僕は、先づ仙臺へ行つて唐澤さんに面會し、それから福嶋へ引き返して實習をした。ついでに郡山へも行つて實習をした。

そのことのあつて以來、時々僕は唐澤さんへ通信することを怠らなかつた。ところが、三年生の夏頃から僕は生涯を紡績會社で送ることが徹底的にいやになつた。それ以前から唐澤さんは、僕が紡績會社へ遣入ることについて非常に心配してゐて下さつた。如何なる勞をも惜しまぬといはれたものだ。然るに僕が急に方向轉換をしてつたので、それから唐澤さんとはぶつたり音信が切れて了つた。

その後唐澤さんが東京にをられるといふことを聞いてゐたので、是非一度御面會の榮を得ようとしてゐた。そして昨年の夏、京都へ行く途中、墨町の片倉本社に、唐澤さんを訪問した。ところが、その時既に唐澤さんは御病氣で見えなかつた。

そしたら最近唐澤さんの悲しい報知に接して了つた。  
(一九三〇・七・三十一 於上田)

### 岡教授歸朝

英、佛で絹絲紡績及び機械學の御

研究を果された、上田蠶絲専門學校教授工學士岡徳治郎氏は米國を経て去る七月十二日無事歸朝された。同教授の出發されたのは昨年の初夏であつたから滿一ヶ年で歸られた理である。即ち二ヶ年の御留學を一年短縮されたのであるが、此れは蠶絲業では世界に冠たる我國で既に十分御研究の後であるから遅れて居る外國で絹絲紡績なんか研究される余地は更にはない事勿論であるのと、元來非常な努力家である岡先生は機械學其他御専門の方面でも常人の二ヶ年を要する仕事を一年足らずで成し遂げられた結果であらうと思ふ。何となれば熱心なる學徒の歐米に留學した場合、一日でも長く居て研究や調査の完全を期したいのが常則であるからだ。無理にも規定以上の延期を考へて歸朝後叱られる様な低能率な人もまゝあるのである。であるから同教授今後の御活動は實に素晴らしいものがあつたと思ふ。紡績と云へば縮紡織を思ひ、蠶絲學校と云へば養蠶と蠶絲の外にないかと考へる人の多い現在に同校の絹絲紡績科の存在を明瞭にする共に絹絲紡績學の又重要なる所以を知らしめて下さる事非常であらうと思ふ。

× × ×  
× × ×  
× × ×